

No.20

青年時代のベヴァリッジ
—社会事業家からジャーナリストへ—

小峯 敦

2000年8月

謝辞

本稿の作成・発表にあたって、次の便宜を得たので感謝したい（順不同）。

- (1) 次の人々から参考文献のいくつかの収集を手伝って頂いた。下平裕之氏（山形大学人文学部）・八田幸二氏（東京都立大学経済学部）・松原聖氏（京都大学経済学部）。
- (2) 本稿の草稿を2000年8月26日（土）に山形大学人文学部で発表した。コメント・質問などを多く頂いた。

要旨

本稿の目的は青年時代のウィリアム・ベヴァリッジの経済思想を探ることである。彼は大学卒業後、隣保館の副館長（1903-）について保守系日刊紙の編集委員（1905-）として活躍した。その間、貧民に個別的な慈善をほどこすのではなく（ミクロ的）、国家の総体的な機能を用いて社会改良したい（マクロ的）という情熱を秘めていた。その情熱は失業問題への傾注で具体化した。彼は職業紹介所や失業保険で調査と提案を行い、全国に専門家として名が通った。

青年時代のベヴァリッジは二重の意味で実践的だった。第1に、労働の移動性の確保という理論と彼自身の転職行動。第2に、社会改良を大衆に啓蒙するというジャーナリズム活動と、それによる彼自身の情報の流通。いずれも隣保館と日刊紙の生活が可能にしてくれた。自由な時間が与えられ、高賃金の出来高制度で、奨学金にも支えられた生活であった。その結果、ついに彼は商務省に高給で雇われることになる（1908）。

青年時代のベヴァリッジは多様な主義主張にさらされ、政府へより接近する過程になった。本稿は後の彼の業績の起源を探る前提作業である。

Key Words: ベヴァリッジ、トインビー・ホール、モーニング・ポスト、社会事業家、ジャーナリスト、職業紹介所、失業問題

JEL Classification (*Journal of Economic Literature*)

B31 History of Thought: Individuals

B Methodology and History of Economic Thought

凡例

- (1) 訳文のあるものは参照しているが、原則として訳は変更してある。
- (2) _ は原文の省略を示す。また[]は筆者による挿入を示す。
- (3) Harrod [1982(1951)]、初版は1951年だが、1982年版を用いている。
- (4) Hicks [1977]訳 p.166、訳本のみを参照した。

2000.8.29

青年時代のベヴァリッジ
—社会事業家からジャーナリストへ—

小峯 敦*

- 第1節 はじめに
- 第2節 生い立ち
- 第3節 社会事業家か社会改良家か
 - 3-1 バーネットの活躍
 - 3-2 最初の職業
 - 3-3 世紀末の社会状況
 - 3-4 隠れた社会改良家？
- 第4節 トインビー・ホール
 - 4-1 失業問題
 - 4-2 ジャーナリストの訓練
 - 4-3 3組の人々
 - 4-4 辞職の理由
- 第5節 モーニング・ポスト
 - 5-1 勤務状況
 - 5-2 ドイツ視察
 - 5-3 命取りの酒類免許法
 - 5-4 ジャーナリズム時代の意義
- 第6節 結語

第1節 はじめに

ウィリアム・ベヴァリッジ William Henry Beveridge (1879-1963)は現代福祉国家の理論的支柱である。さらに理論だけでなく、その政策決定過程にも多大な影響力があった。その偉業はウェップ夫妻やケインズと並ぶ。彼は『ベヴァリッジ報告』（1942）で総合的な社会保障制度を打ち出し、国民の権利としての「最低限までの所得」National Minimum をそこに埋め込んだ。この社会保障制度の前提は完全雇用であった。彼は『自由社会における完全雇用』（1944）も出版した。両著作は戦時中の人々の熱狂的な歓迎を受けた。新しい時代の始まりであった。

それではベヴァリッジの青年時代は何を考え、どんな行動をしたのだろうか。LSE の学長になるなど学界に身をおいた人物というイメージが強いが、実は青年期には多様な職業を経験した。その1つが社会事業家とジャーナリストである。本稿は 1908 年までの彼の思考を追う。そして彼がいかに福祉国家を後に

* 新潟産業大学・経済学部。komine@econ.nsu.ac.jp

建築しうるか、その萌芽を読みとる作業を行う。そこには、社会改革という時代の波に曝される一方、科学的で冷徹な論理も混在する多感な時代を確かめることができる。

第2節 生い立ち

ウィリアム・ベヴァリッジは 1879 年にインドのベンガル州で生まれた。ケインズの4歳年上であり、ラルフ・ホートレー（後の大蔵省調査局長）と同年である。父親はインド省のベンガル地区地方刑事裁判所の判事であり、母方はヨークシャーの実業家であった。父親は中級官吏であったが、外地勤務ということから、本国より給料や家屋の点で贅沢に暮らせたようだ。召使いも 27 人を数えた。しかしインドの風土は当然イギリス本国とは違った。家族は熱病に煩わされ、弟は死に母は聴力を失う¹という悲劇にも見舞われた。

ベヴァリッジは 1892 年にチャーターハウス Charterhouse（サリー州、ロンドンの南）に入学した。この学校はイギリス九大パブリック・スクールの1つ²として有名である。当時の中流・上流階級は子息を全寮制のパブリック・スクールに入学させ、その後にオックスフォード大学またはケンブリッジ大学に送り出そうとするのが一般的であった。この学校は歴史や自然科学を重視する時代の趨勢に反し、古典と数学の教育に熱心だった。そしてスポーツも大いに奨励した。この時代、自然科学を愛好し内省的な少年だったベヴァリッジは、あまり良い印象を持っていない³ようである。

ベヴァリッジは 1897 年秋、オックスフォード大学のベリオール・カレッジ Balliol College, Oxford に入学し、数学の奨学生となった。このカレッジはオックスフォードで最も古い設立で、数々の有名人を輩出している。その中には、例えば自由党のアスキス H.H. Asquith 首相⁴が含まれている。オックスフォード時代は彼にとって、将来の職業を模索する日々であったと同時に、生来の勤勉さが全面的に開花した時であった。彼は4年間で3度も主席になるなど、学業

¹ そのためケインズと同様に、母との文通が数多く残されている。

² あとの8つは Winchester College, Eton College, St. Paul's School, Shrewsbury School, Westminster School, Merchant Taylors' School, Rugby School, Harrow School である。 <http://www.britannica.com/bcom/eb/article/5/0,5716,63365+1+61798,00.html>

³ Harris [1997] pp.55-56。

⁴ 現在でも両者の胸像が残っている。 <http://www.balliol.ox.ac.uk/colport.html>

では秀でていた。しかし、その対象は数学・古典・法律と目まぐるしく変わらざるを得なかった。どの分野でもすぐに高度な水準に達してしまうのだが、それを将来の職業に結びつける不安が常にベヴァリッジを襲っていたからである。そんな中で父親の強い希望もあり、卒業を控えて法曹界で身を立てる準備が進んでいた。指導教官のアルフレッド・ダイシー⁵ Alfred Dicey もその才能を認めた。1902年、同大学のユニバーシティ・カレッジ⁶ University College, Oxford から、ストーウェル研究員として奨学金を得ることになった。この奨学金は年120ポンドであり⁷、ロンドンで働きながら生活し、法律の勉学を続けていくためのものだった。彼にとっては父親の勧めどおり、法廷弁護士の資格を取るための準備期間として使えたのだった。彼は後に大学と交渉して、この奨学金が1909年まで7年間ずっと支給されるように取りはからってもらった。

第3節 社会事業家か社会改良家か

しかし、結果的にベヴァリッジは法曹を捨てた。そして、外面的には社会事業家 social worker として職業のスタートをきった。それがロンドン・ホワイトチャペル Whitechapel にあるトインビー・ホール Toynbee Hall の副館長 Sub-Warden の仕事である。ここではまず、この館の性格をおさえておきたい。

3-1 バーネットの活躍

トインビー・ホールは1884年に、サミュエル・バーネット Samuel Barnett (1844-1913)によって設立された。この館はセツルメント settlement house の一種である。セツルメントは「福祉施設」「社会事業団体」「隣保館⁸」とも訳され、労役場 workhouse に概念上対置される施設である。ワークハウスは救貧法 the Poor Law の中核をなす施設⁹であり、当初は浮浪者の抑留や労働無能力者の保

⁵ 主著『19世紀のイギリスにおける法律と世論の関係』（1905）。この古典はイギリスの19世紀を(1)1800-1830（立法休止時代）、(2)1825-1870（ベンサム時代＝自由放任主義）、(3)1865-1900（集産主義時代）の3つに区分した。

⁶ このカレッジも最古の設立の1つである。

⁷ 後に年200ポンドに引き上げられた。

⁸ 日本語の「隣保」とは隣組の互助組織を意味する。

⁹ settleには入植する、定住するという意味がある。救貧法を支える法律の1つに「定住地法」（居住地法）Law of Settlement and Removal (1662)がある。この法律は居住権を確立させることで貧民の流入出を制限した。教区 parish で公的な救済義務が確定したという側面もある。

護に使われていた。やがてこの施設で貧民を労働させる体制¹⁰になり（遊休資源を許さない経済的効率性）、ワークハウスと呼ばれるようになった。実際には、ここに工場・訓練所・刑務所・病院・保育所など様々な機能を付加されてきた。この労役場は「抑圧の機構」Framework of Repression として、1834 年の新救貧法を支えていた。しかし自由主義的側面の強いこの法律は 19 世紀中盤から事実上、実施されなくなってくる（名目上は存続¹¹）。それに替わって、救貧法の外部で貧民を救おうとする社会的合意、すなわち「予防の機構」Framework of Prevention が台頭してくる。その代表が慈善組織協会 Charity Organization Society (COS)とセツルメント活動である。両者とも、中世以来の私的慈善を社会的・全国的に組織・改変し、貧民（または労働者）の自立支援を行うことを企図した¹²。

セツルメント活動の指導者である牧師バーネットは、積極的にオックスフォードやケンブリッジを訪問し、優れた人材を社会事業にスカウトしてきた。その 1 人がアーノルド・トインビー¹³Arnold Toynbee (1852-1883)である。彼は名著『産業革命史論』で「産業革命」という用語を生み出し、資本主義の発展と貧困の存在に目を向けた。その情熱的な社会活動によって、使徒アーノルドと呼ばれるようになった。しかし彼は 31 歳で夭折したので、友人のバーネットはその死を悼み、教会横の敷地にトインビー・ホールを設立したのであった。その敷地はロンドンのイースト・エンド East End に位置する。この地区は裕福なウエスト・エンドと対照的に、貧民街であった。ロンドン塔の北側にあり、すぐ西側にシティ（金融街）がある。バーネットは富裕階級と貧民の架け橋をするために、あえて最貧地区のホワイトチャペルにホールを造ったのであった。20 世紀の初頭、この館には 15 人から 20 人の居住者がおり¹⁴、彼らは食費と居住費をすべて支払っていた。居住者に具体的な義務はなく、ただそこに住み社会的活動に従事することが期待されていただけだった。職業は公務員・法律家・

¹⁰ 遊休資源を許さない経済的効率性の要請があった。「貧民の有利な雇用」論や 1834 年の新救貧法は、労働市場の確立という点で経済的自由主義に則っている。詳しくは小山[1978] p.44,p.127 を見よ。

¹¹ 1948 年まで救貧法は存続した。

¹² この段階では私的慈善の限界は認識されたものの、貧困＝怠惰 の図式は崩れていない。労働者の生存権保障という権利が確立するのはもっと先である。

¹³ その甥のアーノルド・ジョセフ・トインビーも歴史家として有名である。

¹⁴ Beveridge [1955] p.22。

医者・ジャーナリスト・社会活動家などであった。館は独立採算で運営され、外部からの寄付金が主たる収入であった。

3-2 最初の職業

ベヴァリッジは 1903 年バーネットにスカウトされ、この館に来ることを決めた。彼は「ベンサムのように立法による改革者たれ」という父親の熱望を、逡巡の末ついに拒絶した。それではなぜ、ベヴァリッジは社会事業家を自らの最初の職業として選択したのだろうか。

あり得べき解答は 3 つある。第 1 に、彼が最初から社会事業に情熱を持っていたからである。しかし、この解答は不完全で否定的である。彼は大学 3 年の時にトインビー・ホールに泊まったのだが、その時の印象は極めて悪いものだった。「スラムでの奉仕」slumming や「慈愛に満ちた救済事業」good works に嫌悪感がある、と彼は両親に語った¹⁵。この嫌悪感は父親のそれを確実に受け継いだものである。父ヘンリーは息子が法曹界に背を向け、トインビー・ホールに就職しそうになった時、いささか脅迫気味に息子を諷めている。父親は「手が硬直化した職工」、「プロレタリアートのための無料スープ場」に嫌悪感を露わにし、「あなたとほとんど何の共通点がない人々に慈善をかけること」に全く理解を示さなかった¹⁶。中上流家庭の雰囲気は最下層の人々への具体的な共感を呼び起こさなかったのである。次に解答の第 2 は、第 1 の否定にもかかわらず、社会改良への興味がベヴァリッジに満ちていたからである。彼は人間社会の機能的な働きについて関心があり、人間全体がどの条件で生きるのが可能で価値があるかを探りたいと希望していた。「「国家」の実際的な働きを体験してみたい」¹⁷のであった。そして次のように述べる。

「現代では別種の立法改革が必要である。これは非常に重要だが、ベンサムの改革とは似ていない。これらは根底にある大きな社会問題に暗示される改革である。_この種の改革は法律上というより社会的である。」

(Beveridge [1955] pp.17-18)

¹⁵ Beveridge [1955] p.15。

¹⁶ Harris [1997] p.75。

¹⁷ Harris [1997] p.74。「国家」の原文はギリシャ語。

全体としての国家の機能に注視し、社会改革の必要性を痛感していた¹⁸と言えるだろう。最後の第3は、金銭的な動機である。バーネットからの提示は年俸200ポンドであった。この金額にベヴァリッジは不満を露わにした¹⁹ものの、新参の法廷弁護士に比べかなり良いことを彼は認めた²⁰。それだけでなく、その年俸を家族への説得材料に使っているのもであった。加えてストーウェル奨学金も年120ポンド²¹（後に年200ポンド）で7年間支給されることになった。この奨学金の条件は、オックスフォードから離れても勉学を続けていくことであった。内部的な義務のないトインビー・ホールは、ベヴァリッジにとって最適な職業選択だったのだろう。

3-3 世紀末の社会状況

エリート層の社会改良熱については、若干の補足説明が必要であろう。ここでは19世紀末から20世紀初頭の貧困観と政治状況を概観しておこう。

エリザベス救貧法以来、イギリス国民の貧民に対する考え方は「個人貧」であった。すなわち放蕩癖・放浪癖・浪費癖などの個人的資質は、自分自身の貧困をもたらすという「常識」が存在した。しかし貧民や労働者の実体をつぶさに観察するにつけ、この常識が徐々に崩れ去っていくことになる。決定的だったのは「科学的貧困調査」と呼ばれる社会実態調査である。これはチャールズ・ブース²²Charles Booth (1840-1919)とシーボーム・ラウントリーSeeborn Rowntree (1871-1954)によって独立に実行された。ロンドンとヨークの貧民街調査によっ

¹⁸ この使命感はウェブの「国民的効率の追究」運動とも共通する。この運動は個人ではなく国民（イギリス帝国）のレベルで、集団的な自由を希求する。19世紀末から急速に発展した「集産主義（集団主義、団体主義）」collectivismの流れを汲む。詳しくは姫野[1999] pp.69-70を見よ。

¹⁹ 迷っているベヴァリッジに対し、バーネットは有能な副館長には年350ポンド払うと昇給をほのめかした。しかしベヴァリッジは最も高額になっても年400ポンドほどか、と不平をつぶやいた（Beveridge [1955] p.19）。このエピソードも年俸に敏感な青年を示している。

²⁰ Harris [1997] p.74。

²¹ Harris [1997] p.72 は最初からこの金額を年200ポンドとしているが、不正確である。

²² ビアトリス・ポッター（後のウェブ夫人）はブースの義理の従妹にあたる。若き日のビアトリスもロンドン調査に加わった。

て、次の2点が明らかになった。第1に、住民の約3分の1が貧困状態²³であること。第2に、貧困の原因は個人の資質・嗜好というより、環境・衛生などの社会的要因であること。この調査によって「繁栄のヴィクトリア時代」という幻想が引き剥がされ、人々に一特に上流階級に一良心の呵責と社会的責任を痛感させた²⁴のである。

政治的状況は分裂の一言に尽きる。「世界の工場」を背景に光榮ある孤立を謳歌していた時代は去り、ドイツの経済的・軍事的追い上げ²⁵によりイギリスの衰退が徐々に明らかになってきた。そこにボア戦争（1899-1902）が勃発する。ついで植民地相チェンバレンによる「関税改革運動」（1903）も発生する。この両事件によって、自由党・保守党・フェビアン協会は完全に分裂してしまった。自由党はローズベリ伯、ついでアスキス首相、グレイ外相、マッケンナ海軍相らが「自由帝国主義」²⁶を唱える。キャンベル＝バナマン首相、ロイド＝ジョージ蔵相、チャーチル商務相らは、帝国主義戦争に反対し、社会政策による改良主義を唱えた。保守党（統一党）はチェンバレンの「社会帝国主義」²⁷と、バルフォア首相の自由貿易死守の体制に分裂した。フェビアン協会の多数派（ウェップ夫妻ら）はボア戦争に賛成し、少数派は脱退した。この政治的混乱の中で、政権を奪取した自由党は社会改良派が実権を握った。そして自由党の改革 Liberal Reform と呼ばれる社会立法改革を次々と打ち出していった。以上がベヴァリッジを取り巻く社会環境であった。

3-4 隠れた社会改良家？

こうした社会情勢もあり、ベヴァリッジは社会改良の波にごく自然に親しんだと考えられる。その感覚はオクスブリッジを卒業した者が当然に感じる義務

²³ 貧困線 poverty line 以下の人々。ラウントリーは夫婦子ども3人の家計の貧困線を21 シリング8 ペンスとした（小山[1978] p.180）。これは年収にすると56 ポンド80 ペンスに相当する。独身者にとっての年俸200 ポンドは、かなりの余裕を生み出す。

²⁴ 西沢 [1999] p.150。この両者が「高貴なる者の義務」を形成する。

²⁵ アメリカの経済的追い上げもある。

²⁶ グラッドストーン流の国際協調主義から離れ、帝国主義戦争を支持し、社会主義に反対する勢力。

²⁷ 帝国主義を国内安定装置として用いる考え。具体的には帝国内ブロック貿易（＝関税改革）という保護貿易を行うことで国内産業を保護し、国内の雇用を確保しようとした。

感であった。加えて彼には社会全体・国家の機構を科学的に解明したいという自然科学者の眼が備わっていた。すなわち、正確性・反復性・規則正しさ・数量データを扱う能力である²⁸。このように考えると、貧民街への嫌悪と社会改良への情熱はかろうじて両立しうる。具体的・個別的なマイクロレベルでの貧民・貧困には、この段階ではベヴァリッジには嫌悪感が存在した。しかし国家の機能を確認してみたいというマクロ的な要求が別に存在した。つまり、この時代のベヴァリッジは外面的には立派な社会事業家だったが、内面的には一あるいはより正確に言えば一社会改良家だった。両者の違いは、救済を専ら個人に向けるか、それとも総体としての国民に向けるか、にあると言えよう。彼は母親への手紙（1904）で次のように言う。

「社会事業活動それ自体が多くの研究に値するとは思わない。しかし、知識の手段としては、それ自体は第一義的に有用な手段である。」

(Harris [1997] p.84)

さらに金銭的にも、奨学金の授与条件を満たす自由な時間と十分な年俸があった。それゆえ退屈な法律の勉強から、つまり父親から逃れることができた。これらすべての要因の結実が、トインビー・ホールにあった。

第4節 トインビー・ホール

トインビー・ホールに居住した2年間は確かに物理的には短かったが、ベヴァリッジにとって実りの多い期間であった。その要因を3つに分けて論じておこう。第1に、失業問題の専門家として認知されたことである。第2に、雑誌編集にかかわり、ジャーナリストとしての訓練がなされ、それが次の職業へつながっていくことである。第3に、生涯交誼を重ねる3人（3組）の人物と初めて出会ったことである。

4-1 失業問題

第1の特徴は失業問題への傾注である。ベヴァリッジのトインビー・ホールでの活動は児童教育・選挙運動など多岐に渡ったが、中でも失業問題への取り

²⁸ Harris [1997] p.77。ハリスはベヴァリッジがトマス・ハックスレーTomas Huxley（生物学者）を尊敬していたと指摘している。

組みは群を抜いていた。この館はロンドン失業基金 the London Unemployed Fund やロンドン市長公邸 Mansion House 基金などから寄付金（調査研究費）を賄っていたが、ここでは後者を例として挙げておく。1886 年不況の激化を背景に、ストライキやデモを含む社会主義運動が復調してきた。救貧行政はこの事態に対応できなかつたので、ロンドン市長公邸基金が生み出された。革命的暴力に恐れた人々がわずか 2 日間で 53000 ポンドの寄付をしたと言われている²⁹。この基金を一時的な失業者の救済に用いようとした。しかし結果的には、雇用不適格者（好況でも不況でも失業している者）への単なる慈善として無差別に浪費されてしまった。その事情でこの基金を管理する委員会は 1895 年以来、活動を停止していた。しかし、再び 1903 年に失業救済計画が発動された。4000 ポンドの基金を元手として、バーネットやベヴァリッジに計画の実施が要望されたのである。この基金は 467 人の男達をある島に派遣し、2 週間までの短い仕事を与えることに使われた。3 ヶ月後、ベヴァリッジはイースト・エンドに戻った男達を訪問し、安定した職業を見つけたかどうか調査した。しかし、大部分は全く昔と変わらず日雇い—仕事に就いたりあぶれたり—の状態だった。ベヴァリッジは呆れ果てて、次のように言う。

「イースト・ロンドンでは経済法則が狂ってしまったのではないかと自問したことを覚えている。この男達に需要がないとしたら、なぜ彼らはどこかへ行ったり、または餓死したりしないのか。何が彼らを現在いる場所で生かしているのか。」（Beveridge [1955] p.24）

この経験と自問は 3 つの点で重要である。第 1 に、この体験をさらに発展させてベヴァリッジは臨時雇用 casual employment とそれを巡る産業の状態³⁰に注目していった。第 2 に、私的慈善が資金を浪費するだけで全く役に立たないことが認識され、労働者の状況改善にはもっと別の手段—つまり立法による政府の出番—が必要だとベヴァリッジは痛感した。第 3 に、この段階でベヴァリッジは古典派的な経済法則を労働にも当てはめている。通常の場合、その財は売れ残るか、企業が撤退して別の場所で売るようにするか、

²⁹ 檜原[1973] pp.364-365。

³⁰ 失業（労働）予備軍 reserve of labour や不完全就労（過小雇用）under-employment などが中核概念であるが、ここではその内容には踏み込まない。

どちらかしかない。彼はこの経済法則をそのまま労働市場にも適用していることがわかる。ベヴァリッジは労働調査で判明した点を様々な場所で講演し、様々な雑誌に寄稿した。こうして市長公邸計画から1年後に、彼は失業問題の専門家として認知されるようになった³¹。失業については別稿で詳細に論ずる。

4-2 ジャーナリストの訓練

第2の特徴は、ジャーナリストとしての訓練である。2つの点を指摘しておこう。まず1つは、労働問題への関与それ自体が、実践から学ぶというジャーナリズムの手法に沿っていた点である。この時代の彼は精力的に貧民街を調査し、大学や各種委員会で講演した。

「ゆえに私は当時の主要な経済問題を本から学ぶようになったわけではない。そうではなく、救済を求める失業求職者にインタビューし、前の雇用主に事情を聞き取り、助けるべき者を選び、救済事業を組織することによって学んだのである。」 (Beveridge [1955] p.23)

もう1つは直接的に、『トインビー・レコード』 *Toynbee Record* の編集者になった点である。この月刊誌は教区雑誌 *parish magazine* の性格—キリスト教精神に基づいた私的慈善の布教—を持っていた。しかしベヴァリッジはバーネットの許可を得て編集に関わり、社会改革の討論の場として発展させよう³²と紙面改革した。彼は取材し、執筆し、編集した。つまり雑誌発行に向けてオールマイティな才能を示した。そして後に彼自身、この雑誌が「トインビー・ホールに対して私がした本当によいこと」³³と自賛した。そして、それは次の職業に移る準備となったのである。

4-3 3組の人々

第3の特徴は、その後のベヴァリッジの人生を決定づける3組の人々との出

³¹ Beveridge [1955] p.32。使徒アーノルドの弟子であるアシュレー W. J. Ashley (バーミンガム大学) にベヴァリッジは会い、失業者問題の理論的な分析を書くべきだと勧められた (Beveridge [1955] p.32, Harris [1997] p.95)。ただしハリスはこの教授を W. T. Ashley と表記しているので、現在調査中である。

³² Harris [1997] p.83。

³³ Beveridge [1955] p.24。

会である。1人目はヒューバード・リュエリン・スミス Hubert Llewellyn Smith (1864-1945)である。彼は社会改革の熱情に溢れるオックスフォード大学³⁴を卒業し、1888年から1年間、トインビー・ホールに居住した。同じような経歴を歩んだベヴァリッジに対し、バーネットと共に鼎談し、失業問題について語り合った。その後、ベヴァリッジは商務省 the Board of Trade の次官となったスミスに導かれるように、その部下となるのであった。2人目はウェッブ夫妻である。夫シドニー Sidney Webb (1859-1947)および妻ベアトリス³⁵ Beatrice Webb (1858-1943)とベヴァリッジが初めて会ったのは1904年末である。最初の出会いの印象は芳しくなかったが、徐々に関係は好転した。次の文章はベアトリスの日記による。

「ベヴァリッジはとても不作法だが、正直で、自己に忠実で、冷静な実践家タイプの若い改革者である。不作法なので最初は嫌いだったが、その後は見直すようになった。〔彼は〕自由党に対しては期待していなかったが、保守党を嫌悪しているので、バルフォア保守政権の存続に対しいつも怒っていた。」 (Beveridge [1955] p.23)

両者は労働問題で議論を闘わせていくうちに、1907年ごろ「同盟が成立」³⁶した。この結果、ベアトリスが委員の1人であった「救貧法ならびに困窮救済のための王立委員会」(1905-1909)で、弱冠28歳のベヴァリッジが証言台に立つことになった。失業に関しては初めての証人だった。証言に向けての両者の綿密な打ち合わせが行われ、ベヴァリッジは「ウェッブ夫妻の尽きない努力と用意周到さに感銘を受けた」³⁷と記している。両者の交流はまだ続くが、本稿ではここで留めておく。3人目はジェシイ・メア Jessy Mair との出会いである。彼女はベヴァリッジの従兄の妻であった。1904年始めに彼らは出会った。長い曲折の後、1942年に両者は結婚するのである。

この3組の人々との出会いは、ベヴァリッジの人生を象徴しているとも考え

³⁴ 西沢[1999] p.158。

³⁵ 彼女がシドニーと結ばれる前に、当時の自由党急進派チェンバレンとロマンスがあった事実は興味深い(金子[1997] p.46)。その恋が実らなかった後、彼は帝国主義者へと急速に立場を変えていく。

³⁶ 金子[1997] p.207からの孫引き。

³⁷ Beveridge [1955] p.63。

られる。すなわち冷徹な官僚、社会改革者としての情熱、そしてワーズワースのロマン主義的な詩³⁸に代表される愛情。いずれも彼の人生のある断面を彩る特徴であった。

4-4 辞職の理由

この実りの多い期間にもかかわらず、ベヴァリッジはトインビー・ホールを去った。理由の1つは隣保館の生活に意義を感じなくなったからである。もう1つの理由はジャーナリズムという新しい魅惑的な職業に興味を持ったからである。隣保館に入所する前に抱いていた貧民に対する嫌悪感は、直接の体験で強められこそすれ、弱められたことはなかった。その上、社会改良は個人に対する慈善に留まるべきではなく—その使命感は称賛に値するが—、政府による大がかりな手法で行われるべきと彼は考えていた。彼の性格も災いした。「冷徹な論理はあなたをひどく誤った方向に導く」³⁹と、ある慈善家に警告されたこともあった。バーネット自身、彼を「_大変能力があり、仕事熱心である。しかし部下に対してはあまり我慢強くなく、愚か者の愛好者ではない」⁴⁰との確に判断していた。そのためベヴァリッジを後継者にすることを早々に諦め、別の者を館長代理として入所させていた。そんな折り、失業問題でますます活躍する名声が、次の進路を呼び込んだ。『モーニング・ポスト』*Morning Post*の編集長フェビアン・ウェア Febian Ware が紙面刷新のため、外部から有能な若手を欲したのである。ベヴァリッジはその眼鏡にかなった。年俸 500 ポンドという魅力にいささか有頂天になりながら⁴¹、1905年11月、彼はトインビー・ホールの副館長を辞職した。

ベヴァリッジのこの決意は次のようにまとめられるだろう。隣保館の理想が限定された効果、あるいは全くの無駄しかもたらさないという幻滅を彼は抱いた。そして彼はもっと幅広い社会的運動・改革（あるいはその手法）を求めた。それは自由党政権（1905-1915）による改革の先取りであると、後世の目からは

³⁸ ベヴァリッジは終生、ワーズワースの詩を愛した。トインビー・ホール時代、失業や社会主義の講演には聴衆が数多く参集したが、その詩についての講演には全く人が集まらなかったと彼は嘆いている (Beveridge [1955] p.32)。また臨終に際しても枕元にその詩編が残されていた (地主 [1995] p.41)。

³⁹ Harris [1997] p.95 からの孫引き。

⁴⁰ Harris [1997] p.83 からの孫引き。

⁴¹ Beveridge [1955] p.34。

判断できる。この決意を最も的確な形で表現できたのが、ジャーナリズムの世界であった。彼は既に数多くの講演をこなし、雑誌に多くの論考を発表していた。さらに雑誌の編集も継続して経験していた。次の職業が日刊紙の論説委員—しかも高給の一であるのは、既に予定された配剤のようであった。

第5節 モーニング・ポスト

実は『モーニング・ポスト』は保守党系の日刊紙である。保守系の出版社を選択したという事実も、ベヴァリッジの折衷的な多様性を示している。新しい社主は、保守党も社会改革についての意見を発展させるべきだと考えた。そしてベリオールの学寮長の推薦で、ベヴァリッジに注目していた。編集長ウェアの就任依頼に対するベヴァリッジの返答は、非常に興味深い。

「社会問題を凝視し、政策を形成し、こうした問題の科学的な理解をふつうの気楽な公衆に悟らせるというただそれだけのために、_私は書くべきだろう。私はもちろん彼に、政党政治では私は全く保守党支持ではなく、観念的政治ではいささか社会主義者であると告げた。」⁴²

ウェアの返答は、「逆でないならば良い」であった。こうしてベヴァリッジは今度は家族の賛成もあって、保守党の世論形成の場に立ち会うことになった。

5-1 勤務状況

この多少の分裂的状况にもかかわらず、彼はジャーナリストとしての立場を楽しんだようである。その主な理由は、金銭的・時間的余裕から発生し、しかも信念を曲げる必要がなかった⁴³からである。約2年半にわたる論説委員時代に、彼は60万語も記事を書いた。その記事は自分の信じたこと以外は書かなかったし、2・3の例外を除いて、一語も削られたり掲載を拒否されたことはなかった。論説の守備範囲は徐々に広がり、「失業、苦汁労働 sweating、住宅、都市問題、ロンドンの交通、地方行政と財政、労働組合法、老齢年金、酒類取

⁴² Harris [1997] p.96 からの孫引き。

⁴³ さすがに総選挙の間は保守党の後押しをする気にはなれなかったもので、彼は休暇を取った。また復帰後には労働党の登場を歓迎している。Beveridge [1955] p.51。

引、学校給食⁴⁴、乳幼児死亡など」になった⁴⁵。

金銭的・時間的余裕については、彼の勤務体系から生じた。彼は毎晩 10 時に（後には 9 時に）編集長の部屋にやってくる、記事（社説）を書く必要性を訊いた。仕事がない時もあった。この体制は完全に臨時日雇いである。もし依頼があれば、約 1100 字のコラムを 2 時間程度で仕上げるのであった。実質的な拘束時間は週に 10～14 時間であった。つまり昼間は調査や講演などに時間に割けるのである。出版社の給料は記事の出来高制になっていた。1 コラムにつき 3 ギニー⁴⁶なので、1 週間に 4 コラム（1 年間で 200 コラム）書く計算をすると、年収は約 600 ポンドになった。ベヴァリッジは自分の給料を日雇いレンガ積みと比較している。時間給では 27.5 人分に相当すると彼は計算した⁴⁷。このエピソードは興味深い。ベヴァリッジは労働の非定期性（臨時日雇い）こそ、失業問題の本質の 1 つと見て取っていた。そしてそれを頻繁に社説に訴えた。しかし自身の労働も日雇いの性格を帯びているのである。もちろん賃金は 27 倍以上であるから、自身の労働に貧困はつきまとわない。高度な専門家としての知識が貧困を退散させるという証明を、彼は感じていたはずである。

5-2 ドイツ視察

『モーニング・ポスト』はベヴァリッジのドイツ視察⁴⁸旅行も側面援護した。この費用⁴⁹は自前だったが、記事を 7 つ載せてもらうことで、十分に支弁できた。この旅行の目的は、職業紹介所 Labour Exchange と老齢年金に関する視察である。どちらも救貧法の範囲外で、労働者の生活向上を企図した。

職業紹介所は公的な機関であり、求人と求職の情報を一堂に集めることで、労働の売り手と買い手を効率的に結びつけようとする場である。この機関があれば、偶然や勘に頼って日雇いを繰り返してきた双方に有益である。ベヴァリ

⁴⁴ 1906 年学童給食法、1907 年学童保健法、1908 年児童法。ポーア戦争時の徴兵にあたって、青年の体格が著しく劣っていたことに衝撃を受けた政府は、まず学童の健康に留意するようになった。小山[1978] pp.200-205。

⁴⁵ Beveridge [1955] p.42。

⁴⁶ 1 ギニーは 21 シリング。20 シリングは 1 ポンド。1 シリングは 12 ペンス。

⁴⁷ Beveridge [1955] p.42。

⁴⁸ ドイツはビスマルクの「飴と鞭」政策に則り、社会保障制度の先端を走っていた。鞭とは社会主義者に対する弾圧である。飴の政策はブレンターノらの新歴史学派が中核にいる「社会政策学会」が理論的支柱であった。

⁴⁹ Beveridge [1955] p.56。

リッジは失業問題に関心を持つようになってから、この機関が解決の第一歩と確信していた。彼は「救貧法委員会」に既に証言草稿を提出していたが、その補完としてドイツの職業紹介所を調査したのである。そして帰国後の 1907 年 10 月に証人として喚問された。

それに対し、老齢年金については事情が複雑である。1890 年代に自由党系のブース案と保守党系のチェンバレン案が対立しながら提案されていた⁵⁰。それぞれ無拠出型⁵¹と拠出型の案である。国家による救済の一環として老齢年金の創設の気運が高まっていた。しかし友愛組合⁵²・慈善組織協会・民間保険組合などから強い反対も同時に起こっていた。20 世紀になってから自由党は資力調査⁵³ means test を付けた上での無拠出型案を上梓した。ベヴァリッジはこの案に強く反対した。ドイツの例を引きながら、資力調査を行うべきでないこと、拠出型にすべきこと、がその理由⁵⁴である。『モーニング・ポスト』でのキャンペーンが功を奏したのか、蔵相ロイド＝ジョージはドイツに自ら乗り込んだ⁵⁵。イギリスとドイツの比較を通じ、有力政治家の指導力とベヴァリッジの筆力の相互作用で、3つの社会改良立法がなされた。1908 年老齢年金法、1909 年職業紹介所法、1911 年国民保険法⁵⁶がそれである。

5-3 命取りの酒類免許法

しかしベヴァリッジは保守系紙面のある主張にどうしても賛成できなかった。酒類免許についてである。自由党は 19 世紀後半から、禁酒・節酒運動や酒類

⁵⁰ 矢野[1983] p.209。

⁵¹ 保険料を個人が支払うのではなく、国庫から支出すること。

⁵² 元々は貧民の相互扶助を奨励し、救貧税の軽減を狙って設立された(1793)。しかし次第に救貧行政との関わりは薄くなった。1872 年当時、約 400 万人の組合員がいた。それは労働組合員の 4 倍である。その目的は疾病手当・老齢年金・死亡給付金であった(小山[1978] pp.161-162)。

⁵³ 各個人で拠出金額(保険料)や受け取り金額を区別するため、その所得・資産を厳密に調査すること。

⁵⁴ 1942 年の『ベヴァリッジ報告』でも、同一給付・同一拠出が唱えられ、資力調査は拒否されている。

⁵⁵ 蔵相は視察後に原案を修正し、給付金に所得スライド制を導入した(矢野[1983] p.215)。

⁵⁶ その第 2 部で、世界で初めて大規模な失業保険が誕生した。

免許の強化を謳ってきた⁵⁷。酒の消費については、個人の精神的自立や禁欲・節制を重んじられた。その生産・販売については、大土地所有や独占的免許制を背景にした特権支配に対し、国家の介入が望まれた。他方、保守党はそのキャンペーンに徹底的に抵抗してきた。そしてベヴァリッジもこの面では自由党に味方したのである。この意見の不一致のため、彼は『モーニング・ポスト』に留まることができないかもしれない、と覚悟した⁵⁸。1904年に成立した免許法 Licensing Act は酒類免許の数を制限した。彼はこれでは逆に独占的利潤が増えると危惧した。彼の提案は「酒場の自治体による所有、免許による独占利潤を国家に返すこと、開店時間の厳しい制限、酒類販売による利潤の廃止」⁵⁹であった。彼は完全な禁酒法は無理だとわかっていたが、その提案も十分に厳しく道徳的だった。

「保守党は労働争議法⁶⁰の時は降伏したのに、酒類免許法では徹底して廃案に追い込んだ。急進派としての私はこの時、保守党は政治的原理の擁護者というより、財産の守り手になっていると感じた。」 (Beveridge [1955] p.53)

この論争でベヴァリッジは辞任しないで済んだ。それは自説を撤回したからではなく、法案審議が遅れたため、最終的な対決⁶¹の前に彼は既に次の職業に移ったからである。これらのエピソードは彼の古典的自由主義（節約と自助）の側面を垣間見させてくれる。

新しい職場は商務省だった。自由党政権の中で社会政策派のロイド＝ジョージとチャーチルは新しい仕事を求めていた。前者は商務大臣の後に大蔵大臣になった。後者はウェブの推薦を受けて、ベヴァリッジを商務省に呼ぶことを決めた。職業紹介所に関する立法を進めるためである。その年俸は 600 ポンド

⁵⁷ 1891年の「ニューカッスル綱領」でも酒類販売への規制強化が謳われている(松浦[1992] p.132)。節酒運動は古典的自由主義の一側面である。

⁵⁸ Beveridge [1955] p.52。

⁵⁹ Harris [1997] p.123。

⁶⁰ 1906年成立。

⁶¹ 一応の結末は1909年の「人民予算」にある。この予算案で直接税（所得税・相続税）と間接税（酒類免許税）の両面で大增税が行われた（佐藤[1994] p.461）。また土地課税も行われた。ロイド＝ジョージ蔵相の意図は、特権階級への課税を強化すると共に、その税金を軍拡費（特に海軍）と社会保障費にあてようとしたことである。

の常勤であったが、年金や退職金はなかった⁶²。特にチャーチルはベヴァリッジの先輩であることに注意したい。その意味は、この政治家自身も『モーニング・ポスト』の記者として海外派遣された⁶³ということである。士官学校によく入学したチャーチルは、新聞記者としてナイル遠征部隊に派遣された。翌年にはボア戦争の従軍記者となり、そこで捕虜になった。しかし脱走後に本国で政治家に転身する。1900年保守党議員の誕生である。1903年チェンバレンの関税改革に反対して自由党に移った。そして植民地相の後、商務大臣として、後輩ベヴァリッジを受け入れた⁶⁴のだった。ともあれ、『モーニング・ポスト』で活躍するベヴァリッジの名声は、ついに大臣の耳まで届いたのである。

5-4 ジャーナリズム時代の意義

ジャーナリズム時代の意義を3つにまとめておこう。第1に、何よりも自覚しているように「社会問題を理論的・实际的に研究し、それについて書くことで生活できる」⁶⁵という時間が確保できたことであった。具体的な社会問題は職業紹介所と老齢年金であり、その必要性について世論の喚起をおこなった。それに付随してドイツ視察旅行という貴重な体験も得られた。彼の著作は時に折衷的⁶⁶（理論と実証、保守と革新）と論評されることもあるが、それはこの時代に強化されたと考えられる。彼が後に学界に身をおきながら、公職にも民間にも時に招聘されたのは、この性格によるものであろう。第2に、保守主義と革新主義の混在がさらに際立ったことである。そもそも保守党支持ではないのに、保守系の日刊紙の職を受けた点にその混在が伺える。酒類免許問題では臍首をかけて、自由党よりの社説を書いた（古典的自由主義）。フェビアン協会⁶⁷の中核メンバーであるウェップ夫妻とも同盟を結んだ（社会主義または新自由主義）。外交問題では帝国主義者であった⁶⁸。あらゆる主義主張の混在は一

⁶² Beveridge [1955] p.73。

⁶³ Beveridge [1955] p.70。

⁶⁴ しかし34年後、チャーチル首相は『ベヴァリッジ報告』を何とか公表しないようにと圧力をかけたのであった。

⁶⁵ Beveridge [1955] p.70。

⁶⁶ Harris [1997] p.126。

⁶⁷ 1884年設立。漸進的な改良主義を唱えた社会主義者の集まり。

⁶⁸ Harris [1997] p.122。

当時の政治状況の一般的特徴でもあったが一、折衷的なベヴァリッジの特徴を強化している。第3に、外面的に見れば、新自由主義⁶⁹（個人をベースとした旧来の自由主義ではなく、国家の積極的介入を支持する社会改良主義）の喧伝は、自由党系・労働党系の雑誌・日刊紙だけでなく、保守系の『モーニング・ポスト』も覆っていたことが指摘できる。

第6節 結語

青年時代のベヴァリッジは二重の意味で実践的だった。第1に、労働問題についてである。彼は失業問題解決の要諦を「労働の移動性」の強化、つまりより完全な労働市場の創出に求めた。その手段が職業紹介所である。失業保険という安全網に支えられた労働者は、この施設によって求人の情報をつかみ、効率的な労働供給ができるのである。この効率性は、高賃金につられて転職を重ねるベヴァリッジ自身の求職活動と完全に重なる。彼は理想的な労働者を高度な流動性・移動性を持つ者に求め、それを自らの転職（社会実業家からジャーナリストへ、さらに高級（高給）官僚へ）で実践したのだろう⁷⁰。第2に、ジャーナリズムについてである。彼は社会改良を世論に浸透するために、積極的に様々な情報伝達媒体に関わった。ジャーナリストとしての自信は、自叙伝の題名が『強制と説得』*Power and Influence* であることから伺える。「説得」とは他人の理性・感情に訴えて、その行動を変えさせるという意味⁷¹である。それは編集者として、論説委員として、社会調査家として、多様な関わりであった。世論の喚起によって社会改良の必要を知らしめること。この情報伝達は自らの有能さの宣伝と完全に重なる。ジャーナリズムに身をおくことがベヴァリッジ自身の情報を世間に伝達し、自らの昇進の触媒という実践になった。

関係者年表（年俸付き）

	ベヴァリッジ	ケインズ
1879	生	
1883		生
1892	Charterhouse 入学	

⁶⁹この用語はハイエクの自由放任主義を指すことも多いが、本文の使用法は違う。新自由主義の説明とジャーナリズムとの関係は、姫野[1999] pp.53-58 へ。

⁷⁰ 熟練職人の場合。非熟練労働者の場合は、何よりも継続的な雇用が必要。

⁷¹ Beveridge [1955] p.3. ケインズも『説得論集』（1931）を出版した。

1897	Balliol College 入学	Eton 入学
1901		King's College 入学
1902	Stowell Fellowship 獲得(120→200)	
1903	Toynbee Hall 入館(200)	
1905	同辞職、 <i>Morning Post</i> (500)	
1906		インド省へ(200)
1908	同辞職、商務省へ(600)	同辞職
1909	職業紹介局長(700) ⁷²	King's College fellow (120) ⁷³
1911		<i>Economic Journal</i> 編集長(?)

そしてこの二重の実践性を可能にしたのが、トインビー・ホールと『モーニング・ポスト』の生活であった。彼は奨学金を毎年獲得しながら、出来高制で高賃金をもらい、自由な時間を各種活動に割けた。ベヴァリッジは情報の力に関し、ウェッブ夫妻や自身の役割を次のように述べている。

「誰が時の権力者になろうとも、影響力や理性や特別の知識は必要であろう。もし私が『モーニング・ポスト』紙上の社会改革のキャンペーンを行わなければ、どんなことでも成功は難しかっただろう。権力の持ち主は普通、忙しすぎて考えている暇がない。ウェッブ夫妻は、考えるための頭と時間を兼ね備えていたのである。」 (Beveridge [1955] p.70)

青年時代のベヴァリッジも頭脳と時間があった。そしてベアトリスと同じく⁷⁴、十分な金銭もあった。その才能と機会を十全に用いて、彼はより政府へ接近し、あるいは取り込まれていくことになる。その重大なステップとして、青年時代ベヴァリッジを見るべきである。

⁷² 毎年 25 ポンド昇給、上限は 900 ポンド。当時の商務大臣は年 2000 ポンド。Beveridge [1955] pp.72-73。LSE (London School of Economics and Political Science) の学長候補の話 (1919) は興味深い。ケインズは年 1500 ポンドの提示で就任を依頼されたが、断った。ベヴァリッジは年俸の引き上げを要求し、年 2000 ポンドで受諾した。Dahrendorf [1995] pp.138-140 を見よ。

⁷³ その他にピグーから年 100 ポンド (マーシャルの申し送り事項) の私的奨学金、父から 100 ポンドの収入があった。

⁷⁴彼女の父親の遺産 (年 1000 ポンド) が考える時間と権力者への接触を可能にした、とベヴァリッジは判断している (Beveridge [1955] p.70)。

参考文献

- 岡田与好『経済的自由主義—資本主義と自由—』東京大学出版会 1987。
- 檜原朗『イギリス社会保障の史的研究(1) —救貧法の成立から国民保険の実施まで—』法律文化社 1973。
- 金子光一『ピアトリス・ウェブの福祉思想』ドメス出版 1997。
- 川北稔編『イギリス史』山川出版社 1998。
- 小山路男『西洋社会事業史』光生館 1978。
- 佐藤芳彦『近代イギリス財政政策史研究』勁草書房 1994。
- 地主重美「ウィリアム・ベヴァリッジ—失業論と社会保障論のフロンティア—」 pp.27-49 社会保障研究所編『社会保障の新潮流』有斐閣 1995。
- 西沢保「救貧法から福祉国家へ—イギリスの社会政策学派—」 pp.149-166、西沢保・服部正治・栗田啓子編『経済政策思想史』有斐閣 1999。
- 姫野順一「新自由主義とフェビアンイズムの政治経済学—市民的社會改良 vs 国民的効率—」 pp.52-73、服部正治・西沢保編著『イギリス 100 年の政治経済学—衰退への挑戦—』ミネルヴァ書房 1999。
- 松浦高嶺『イギリス現代史』山川出版社 1992。
- 矢野聡「イギリスにおける無拠出老齡年金思想の展開」 pp.191-218 小山路男編著『福祉国家の生成と変容』光生館 1983。
- Beveridge, W. H. *Unemployment: A Problem of Industry*, London: Longmans, Green and Co., 1909.
- Beveridge, W. H. *Unemployment: A Problem of Industry (1909 and 1930)*, London: Longmans, Green and Co., 1930.
- Beveridge, W. H. *Power and influence*, London: Hodder & Stoughton, 1955. 『ベヴァリッジ回顧録 強制と説得』伊部英男訳 至誠堂 1975。
- Dahrendorf, R. *LSE: A History of the London School of Economics and Political Science 1895-1995*, Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Harris, J. *William Beveridge*, revised paperback edition, Oxford: Oxford University Press, 1997 (First published in 1977).
- Harris, J. "Beveridge Social and Political Thought", in Hills, J., J. Ditch, and H. Glennerster (eds) [1994], pp.23-36.
- Hills, J., J. Ditch, and H. Glennerster (eds), *Beveridge and Social Security*, Oxford: Clarendon Press, 1994.

